

# 1 国 語 科

羽場邦子・岩本和貴・谷 栄次

## 1 「感性を育む」学習の成果と課題

主体的学習活動を組織するには、学習を推進するための原動力となる関心・意欲の高揚を図らなくてはならない。そのためには、子どもたちが、学習することの楽しさや喜びを感じることができ、授業を組織する必要がある。国語科では、研究テーマ「感性」のもとで、豊かな感性を備えた子どもの育成や感性を育む学習スタイルの構築を目指した。課題解決的な学習への取り組みを中心に、子ども自身の力で気づき、考えた結果が、満足感や達成感を伴うものになるように、実践を重ねてきた。各領域の「学習ステップ」を作成し、「つかむ」過程、「学習課題づくり」に焦点を当てた。

成果としては、一斉学習やグループ学習という形態の中で、課題解決的な学習が1つの学習形態として確立できつつあることが挙げられる。子どもたちには、次のような変化が見られる。まず、教材を読むときに、「課題づくり」を意識する姿勢が生まれている。国語科の授業における「課題づくり」とはどういうことか、つかんできたようだ。また、具体的なめあてをもって学習に取り組むことができるようになった。その結果、「課題さがし」や「課題づくり」は、少しずつ質の高いものになってきたと感じる。優れた課題をつくることができたということは、教材をしっかり読むことができたということである。

課題として、「ふりかえり」の過程での評価が、技能的観点にとどまることが多い点が残っている。何を目指し、どのような観点で評価すればよいのか、「ふりかえり」の段階で曖昧になっている場合がある。指導にも工夫（掲示・ワークシートなど）の余地がある。発達段階に合わせ、6年間を見通した学習方法の計画と、学校週5日制を踏まえて教育課程全般を見直すことも課題である。

## 2 自ら学ぶ学習主体を目指した国語科の学習

### (1) 課題解決的な学習への取り組み

「感性を育む」に続く本校の研究テーマは、「自立に向かう子ども」の育成である。「発達段階に応じて、他との関わりの中で、自ら考え、判断し、行動していく子」を目指している。

国語科で取り組んでいる課題解決的な学習において、「自立」とはどうとらえられるのか。

もともと、課題解決的な学習に取り組んだのは、子どもたちが優れた認識主体として自立できることを目指したからである。「課題づくり」を意識して読むことができるようになった子どもたちにとって、学習を「見通す」力をもつことが重要だと考えている。課題を自らの力で分類・整理し、自らがどうやって解いていくのかについて考えるようになってこそ、「自立」した学習主体と言えるのではないか。これは同時に、本校国語科が目標としている、「国語科教育は、言語にかかわる知識・技能を基にして行われる言語活動（理解・表現の活動）を通して、児童・生徒を優れた認識主体にするために行われる。また、このような学習の過程を通して、国語に関する基礎技能と基本的言語技能を育成し、言語に対する感覚を磨き、望ましい言語習慣、言語態度を育成する。（下線執筆者）」<sup>1)</sup> ことと同義であろう。学習を「見通す」力を身につけることによって、設定した学習課題が、本当に「解く」価値のあるものかどうかを見抜くことができるようになる。

一斉学習において学習を「見通す」ためには、学習者共通の課題を一人一人が自分のものにしていなければならない。子どもたちにとって、めあては「いかに課題を解決するか」にあるが、実はそれは学習課題をより必然性のある、精選されたものにするための活動である。教師は、子どもが適切な「見通し」をもてるような指導・支援を行う必要がある。教師の指導・支援は、子どもに、

「こんなに勉強したんだ」という満足感と、「もっと勉強したい」という欲求を生じさせるものであるべきだろう。優れた指導・支援とは、いかにも子ども自身が気づいたという演出が、巧みになされているものである。学習ステップでの「ふりかえり」を重視するなどの取り組みによって、自分が学習した方法を振り返り、そのよさや次の課題に気づくような評価ができるようにしたい。

## (2) 子どもの発達段階をふまえた指導・支援

国語の授業における、教師の役割とは何か。簡潔に言えば、子ども自身の読みを作る上での指導・支援であると考えている。支援とは「指導の中に含まれ、子どもが安心して主体的に学習を進めていくことができるように、場を設定したり、観点を与えたりする教師の支援活動であり、教師の積極的な子ども一人一人を生かすための働きかけである。」ととらえている。竹長吉正氏は著書の中で、「子どもたちは、「読みのぶつかり合い」や「読みのせり上げ」において、自分の読みを作っていく。「ぶつかり合い」やせり上げの場を設定するのは教師であるが、読みを作っていくのは、あくまでも、子どもたちである。…(略)…たとえば、子どもたちの力ではこれ以上読みが進まない場合、教師はその読みを進める糸口を与えてやる必要がある。その糸口とは、「関係づけ」や「意味発見」における答え(内容)そのものではなく、その答えを子どもが自分の力で獲得するための方法やヒント(着眼点)のことである。」<sup>2)</sup>と述べる。とすれば、十分な指導・支援を行うためには、学年発達段階に応じた教材研究と、一人一人独立した個性をもつ、子どもの実態把握がより重要となる。

子どもが課題を整理し、学習の見通しをもつ際の、発達段階や教材に応じた指導・支援は、大まかに次のように考えられる。

低学年では単元全体の見通しももちにくい。子どもの感想やつぶやきなどの反応から、興味・関心の向いている点を分析し、教材の特質と合わせた課題を教師が提示することが多いであろう。教師の指導目標とは別の、子どもが活動する上でわかりやすく具体的なめあてを設定する、めあてを二重構造にした学習過程などの工夫も考えられる。中学年になると、自分なりの学習に対するこだわりが強くなる。その意欲を大切にしたい。子どもが、自分の力で見通しをもって学習に取り組んで成果をあげているんだ、という充実感を味わうことができるように、さまざまな視点や選択の機会を適切に与えることが必要である。高学年は、質の高い学習課題を設定して、明確な見通しのもとで、学習を主体的に進めることができるようになる時期である。教師は、子どもの意見をまとめ、大まかな方向づけをしていくよう心がけたい。

	←子ども主体の学習	教師の指導・支援→
低学年	(めざす子ども像) ・多様な学習方法を経験し、学習することの楽しさを感じる。	
中学年	・自分なりの疑問や気づきを大切に、課題解決的な学習に向かう。	
高学年	・自分たちの力で見通しをもち、課題解決的な学習をめざす。	

1) 「国語教育学の基礎」(森田信義・山元隆春ほか/溪水社)

2) 「読者論による国語教材研究/小学校編」(竹長吉正/明治図書)

理解領域（文学的文章）

学習のステップ	めざす子どもと具体的な学習活動	支援活動
①出会う	1) 題名読みをすることができる。 ○イメージを豊かにもつことができる。 ○予想することができる。 2) 感想, 意見, 疑問をもつことができる。 ○本文を通読することができる。 ○感想, 意見, 疑問をもち表現することができる。	絵・写真・資料などの具体物を提示する。  気づきの観点を指示する。 範読する。 表現の方法をともに考える。 感想・意見・疑問をつかむ。
②見通す ・課題を作る  ・解決の方法を 考える	1) 感想, 意見, 疑問を分類・整理することができる。 ○分類の観点をもつことができる。 (登場人物別・場面別・行動パターン別など) ○分類の観点に沿って整理することができる。 2) 学習課題をもつことができる。 ○互いの表現の違いについて考え合うことができる。  3) 課題を解決するための見通しをもつことができる。 ○課題解決のための学習方法や活動を考えることができる。 ○自分の考えをもつことができる。 ○考えを出し合い, 比べ合うことができる。 ○単元全体の学習計画を立てることができる。	分類・整理方法の観点を指示する。 感想・意見・疑問をプリントにする。  整理の仕方を助言する。 共通の課題であることを確認する。  発問計画と, 子どもの発言を比べ, 補う, 適切な方法や活動を選択できるよう, 方向 づける。 子どもの発言を聞きまとめる。
③解く	1) 課題を解決することができる。 ○登場人物の性格をとらえ, 場面の情景を想像することができる。 ・登場人物の行為とその意味をとらえることができる。 ・登場人物の心情に迫ることができる。  ○登場人物の生き方や考え方から自分なりの思いをもつことができる。 ○作品の主題について考えることができる。	板書を工夫する。 発表を補う。 問い返す。 認める。 考えを話す。 助言する。 子どもの考えをまとめる。 学習の仕方について形成的評価を行う。 子どもにも自己評価できるよう言葉かけを行う。
④まとめる (ふりかえる)	1) 課題のつくり方, 解決の仕方を振り返って, よいところや問題点に気づくことができる。 ○観点にそって自己評価できる。 ○次の学習について意欲や課題をもつことができる。	評価の基準・観点を示す。 学習の仕方について評価する。
⑤つくる	1) 課題解決の結果をもとに表現することができる。  ○表現読みをすることができる。 ○身体や言葉を使った表現をすることができる。 (手紙, 劇化, 紙芝居, 感想文, 絵, 続き話, 新聞作りなど)	子どもが楽しみながら活動できる場を設定する。 それぞれの表現を認め, 評価する。

理解領域（説明的文章）

学習のステップ	めざす子どもと具体的な学習活動	支援活動
①出会う	<p>1. 題名読み ○イメージを豊かにもつことができる。 ・内容を予想する（例や話題など） ・読みの構えを作る</p> <p>2. 感想、意見、疑問をもつことができる。 ○本文を通読することができる。 ○筆者の意図を感じとることができる。 ○感想、意見、疑問を本文に書き込むことができる。 ・自分の予想との差から、述べ方の工夫に気づき、疑問をもつ。 ・一人一人が学習課題をもつことができる。</p>	<p>絵・写真・資料などの具体物を提示する。 難解語句の説明。 これまでの学習の想起を促す。</p> <p>感想を書くための観点を与える。</p> <p>書き込みの方法をともに考える。 感想を聞く（机間指導）。</p>
②見通す	<p>1. 一人一人の学習課題を分類、整理することができる。 ○分類の観点をもつことができる。 ・自分の疑問と他人の疑問を比較・検討し、共通点や差違に気づく。 ・分類の観点をもつことができる。 ことがら・内容 表現 論理 ○学習課題を整理することができる。 ・学習課題を分類の観点に従って、整理することができる。 ・学習課題を意識して本文を読み返すことができる。 ・個人や小グループでは解決できる課題は解決する。</p> <p>2. 共通の学習課題をもつことができる。 ・個人やグループで解決できなかった課題。</p> <p>3. 学習課題を解決するための見通しをもつことができる。 ○学習課題を解決する方法を考えることができる。 ○学習課題は妥当なものかどうかをふりかえることができる。 →「1. 分類、整理」にもどる。 ○考えを出し合い、比べ合うことができる。</p>	<p>分類・整理方法の観点を提示する。 感想、意見、疑問をプリントにする。 既習事項を生かすように促す。 課題の質や量によって、学習集団の形態を変える</p> <p>自分の考えを効果的に説明できるように指導する（ノートなど）。</p> <p>発問計画と子どもの発言を比べ、補う。 お互いの意見を否定し合うのではなく、違いについて話し合うように配慮する。 意見の違いが効果的に表れるような板書を工夫する。</p>
③解く	<p>1. 設定した方法で学習課題を解決することができる。 ○学習課題を見直して、よりよいものにしようとする姿勢をもつことができる。→「②」の「1. 分類、整理」にもどる。 ○設定した方法を見直して、よりよいものにしようとする姿勢をもつことができる。→「②」の「3. 見通し」にもどる ○学習課題を解決する過程で、筆者の工夫に気づき、その効果を考えることができる。 ・文章構成（筋道・段落）に着目する。 ・文章表現に着目する。 ・話題・事例に着目する。 ・重要語句を発見する。 ○他人の意見を参考にして、自分の意見を磨くことができる。</p>	<p>話し合いの論点や結果がよくわかるような板書やワークシートを工夫する。 不十分な話し合いや結論に対して問い返す。</p>
④確かめる	<p>1. 筆者の工夫を確認・検討し、評価することができる 2. 残された学習課題を検討することができる。 ○文章の課題を発見することができる。 ○課題のつくり方、解決の仕方を振り返って評価することができる。 ・観点に沿って自己評価できる 3. 批評活動を行う。 ○文章の、足りないと考えられるところは補い、自分ならこう書くと考えるところは書き直してみる。 ○事例を置き換えてみる。 ○書き直した文章を、学習内容に照らして点検することができる。</p>	<p>課題解決の結果をわかりやすく整理する。</p> <p>評価の基準・観点を与える。</p>

表現領域（作文）

学習のステップ	めざす子どもと具体的な学習活動	支援活動
①出会う	<ul style="list-style-type: none"> <li>○身の回りの事柄に関心を持つことができる。</li> <li>•身の回りの事象を感じ取り、伝えたいと思う</li> <li>•興味や関心に照らし合わせて事象を見つめる</li> <li>○書きたいことの範囲や方向性を定めることができる。</li> </ul>	<p>参考作品を提示する。 子どもたちへの視点を決めて、参考作品を選ぶ。</p>
②見通す	<ul style="list-style-type: none"> <li>○書こうとする事柄について、感想、意見、疑問等を持つことができる。</li> <li>•追求の意欲を持つ（気づく→感じる→考える）</li> <li>•自分なりの考え（めあて）を持つ</li> <li>○材料を集めることができる。</li> <li>•書こうとする事柄について、想像する</li> <li>•考えの根拠を求める</li> <li>○材料を選ぶことができる。</li> <li>•書きたいこと→書けそうなこと→書けること</li> <li>•事柄の密度、質、面白さ等に照らし合わせて考える</li> <li>○作文メモを書くことができる。</li> <li>○書くことの本質をつかむことができる。</li> <li>•大事なこと（価値）に気づく</li> <li>•事柄の軽重を比較しながら考える</li> <li>○大まかな構想を抱くことができる。</li> <li>•論旨を認識する</li> </ul>	<p>気づきの観点を提示する。</p> <p>取材のための資料や場を提供する。</p> <p>材料選びの視点を与える。</p> <p>メモの様式を提示する。</p>
③つくる	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 構想を立てることができる。</li> <li>○構想メモを作る</li> <li>•話の展開のイメージ化と順序の整理をする</li> <li>•場面分け→順序→展開→補足</li> <li>•序論、本論、結論 起・承・転・結</li> <li>2) 構想に照らして書くことができる。</li> <li>○構想メモに沿って記述できる。</li> <li>○書きながら構想メモを振り返り、練り直しをした所はメモに書き込みを行う。</li> <li>○構想メモに沿って下書きをする。</li> </ul>	<p>机間指導を行う 書くことが苦手な子どものために参考となる資料を用意する。</p> <p>机間指導を行う。 形成的に評価しながら、子どもが意欲的に記述できるように配慮する。</p>
④ふりかえる	<ul style="list-style-type: none"> <li>1) 推敲することができる。</li> <li>○記述の誤りを正すことができる。 (誤字、脱字、用法の誤り、表記の誤り等)</li> <li>○書きたいことが書けているか、文章を吟味することができる。</li> <li>○推敲に従って清書することができる。</li> <li>•文字の丁寧さを意識する</li> <li>2) 作文を読み、自己評価することができる。</li> <li>•作文を読み、自分が表現しようとした事柄を感じ取る</li> <li>•推敲して直したことで良かった点をふりかえる</li> </ul>	<p>推敲の方法を指導する。</p> <p>推敲の観点を示す。 机間指導を行う。</p> <p>子どもたちの作文を紹介する。 全体で評価する。個別に評価する。</p>

言語事項（書写）

学習のステップ	めざす子どもと具体的な学習活動	支援活動
①出会う	1. 本時の教材を知り、試書することができる。 ○既習事項を生かして書くことができる。 ○教材の特徴に気づくことができる。 2. 試書を観察して、課題に気づくことができる。 ○手本や板書、他人の試書を参考にして、自分なりの課題を発見することができる。 ○発見した課題を試書に書き込むことができる。	必要に応じて、難しい点画などの書き方を説明する。 前時までの学習の想起を促す。 適切な学習形態を指示する。
②つかむ	1. 一人一人の学習課題を分類し、系統化することができる。 ○分類の観点をもつことができる。 ・自分の疑問と他人の疑問を比較・検討し、共通点や差異に気づく。 ・文字の組み立て・基本的点画・配置・運筆・姿勢・道具の使い方などを観点にもつ。 ○学習課題を整理することができる。 ・学習課題を分類の観点に従って、整理することができる。 2. 共通の学習課題をもつことができる。 ○整理した学習課題を基に、共通の学習課題をもつことができる。 ・本時の教材に取り組む上で、最も着目すべき点に気付き、共通の学習課題として取り上げることができる。	分類の観点を提示する。 既習事項を生かすように促す。  整理方法の観点を提示する。  教材の特質から、共通となる課題は予想しておく。
③見通す	1. 学習課題に取り組む上で、どのような練習をすればよいかの見通しをもつことができる。 ○学習課題に添った練習方法を考える。 ○学習課題を意識して教材を分析することができる。 ○学習課題が妥当なものかどうかをふりかえることができる。→「②つかむ」 ○考えを出し合い、比べ合うことができる。	経験した練習方法の想起を促す。 発問計画と子どもの発言を比べ、補う。 お互いの意見を否定し合うのではなく、共通の課題となる部分はないか、話し合うよう配慮する。 意見が集約できる、効果的な板書を工夫する。
④書く	1. 学習課題を意識して練習することができる。 ○自己修正を通して、学習課題への意識を高めることができる。 ○学習課題が妥当なものかどうか、ふりかえることができる。→「②つかむ」 ○設定した練習方法を見直して、よりよいものにしようとする姿勢をもつことができる。→「③見通す」 ○相互修正や話し合いにより、他人のよいところを自分の練習や考えの参考にすることができる。 2. 練習の成果が表れた作品を清書として選ぶことができる。 ○学習課題を意識して、自分で選ぶことができる。 3. 清書に配置や大きさを考えて、名前を書くことができる。	学習課題を意識しやすいワークシートや板書を工夫する。 机間指導によって、筆遣いをアドバイスする。 新たな学習課題が出てきたら、「②つかむ」「③見通す」に戻り、効率よく練習の観点を提示する。 不十分な話し合いや結論に対して問い返す。 学習課題を確認し、自分の力で清書を選ぶように徹底する。
⑤確かめる	1. 学習をふりかえて自己評価を行うことができる。 ○学習課題の設定と練習方法、清書の3点についてふりかえり、成果と課題をまとめることができる。 ・他人の発表を評価し、次時の学習活動に生かすことができる。 ・評価カードを記入し、自分のふりかえりを整理することができる。	課題解決の結果をわかりやすく整理する。 評価の基準や観点を確認する。
⑥片づける	1. 清書提出と片づけが手際よくできる。	